

オススメ本案内コーナー

光野 有次^{1), 2)}

- 1) 有限会社でく工房 取締役会長
2) (一財) 日本車椅子シーティング財団 監事

僕には二人の偉大な師匠がいます。逝去されていますので、正確に言えば「いました」というべきでしょうが、今も二人は僕の中に生きています。「手で考える」とご両人から異口同音に何度も同じ言葉を聞いています。

まず母校の金沢美術工芸大学で柳宗理先生の薫陶を受けました。秋岡芳夫さんは社会人になってから押しかけ弟子にしてもらっています。お二人とも我が国の工業デザインの草分けと呼ばれている方です。

不思議な事ですが、離れていたにもかかわらず、ご遺体に直面でき、それぞれにお別れができました。

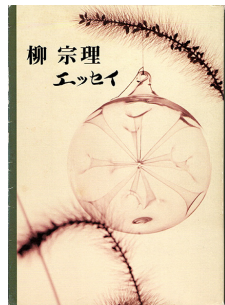
柳宗理 エッセイ

柳宗理 著

平凡社、2003年発刊

ISBN4-582-83160-5

※ 2011年、平凡社ライブラリーにおいて復刻版(発売中)



<https://www.heibonsha.co.jp/book/b160918.html>

柳先生はバタフライ・スツールで世界的にも著名で、生涯「モノづくり」に真摯に生きた人です。

僕らの工房でつくる当時の「座位保持いす」をデザイン雑誌や新聞などに紹介していただき「君たちがつくるものはホンモノだ」と大変ほめていただいたことを思い出します。またブルーノ・マツソン賞に推

薦して下さり、スウェーデンで学ぶチャンスを頂きました。

本書は著者が88歳で刊行した初の著作選集で、デザイン論、数々の自作解説をはじめ、伝説的連載「新しい工藝・生きている工藝」、日本と世界のアノニマス・デザイン、そして父・柳宗悦と民芸運動についてなどで柳先生の一貫したデザインの考え方が、この一冊に集約されています。

僕らが日常使っているナイフやフォークそしてステンレスのボールやヤカンなど多くの方が手にしているものも少なくありません。そのどれもが柳カーブとも呼ばれる優美な独特の形状です。今でもあちこちで販売されています。僕らにも手に入る価格ですので、現代の民芸品とも呼ばれる所以です。

柳先生は流行に左右されるデザイン、あるいは流行を作り出すようなデザインを極端に嫌い「商業主義」と切って落とされていました。

モノづくりの感性は生来のものかもしれませんが、やはり民芸運動を始めた父親・柳宗悦の影響も大きいと思います。

美大の講義でも何度も聞いた「アノニマス・デザイン」。民芸と呼ばれるようになったモノの作り手達は、当時は無名の人でした。「その土地土地の生活の用に準じて、忠実に素直に造られたもので、健康な平穏な美しさがある」と述べています。そして機械時代の現代においては、デザイナーがタッチしていないものはわずかで、その代表として「ジーパン」、「野球のボール」、そして「ピッケル」を挙げています。これらは用になつた美しさ、すなわち「用即美」という民芸の精神と通じるものとして紹介されています。

食器や椅子やテーブルなどの他に大きなものでは橋梁のデザインでも有名です。当時の「構造計算に忠実に設計すれば自然によい形ができるはず」とい

1) 有限会社でく工房

〒196-0002 東京都昭島市拝島町 2-11-10

E-mail: mitsuno@deku-kobo.com

う意見に対し、構造美の必要条件ではあるが十分条件ではないので、それだけじゃ「最適経済解決策」でしかないと厳しく、美しい橋や高速道路の防音壁などのデザインも積極的に手掛けられています。

このことは、今、全国あちこちで見かけられる醜悪な携帯電話の電波塔のデザインにも言えます。美しさと景観など全く度外視し、経済効率だけで立てられたものの例として僕らは指摘し続けなければならないでしょう。

MUJI BOOKS 人と物7

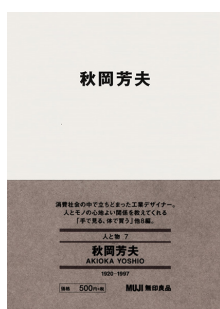
秋岡芳夫

秋岡 芳夫 著

良品計画、2018年発刊

ISBN978-4-909098-12-2

※「無印良品」店舗で発売中



<https://book.douban.com/subject/35146188/>

一方、秋岡さんは1953年にKAKというデザイン事務所を仲間と立ち上げ、カメラやバイク、そしてオーディオなど当時の日本製品を世界レベルにのしあげることに貢献した方です。KAK時代のデザインで今も残っているのはケースに芯削りが付けられている鉛筆のユニです。

しかし、秋岡さんは高度経済成長の真ただ中の1970年(大阪万博)を前に、これまでのデザイン活動を辞め、のちに「生活デザイン」とも呼べる新しいデザイン運動を始めます。そこに僕も参加したわけですが、実は工房の仕事を始めたばかりで、鉋の刃の研ぎ方もよく分からなかったのですが、幸いなことに自宅で木工教室を開かれており、そこで指導を受けることになりました。文字通り「手取り足取り」教えてもらいました。

勿論そのこともさることながら、デザインやモノづくりが社会にどうかかわるべきかという教を、毎週木曜日の夕刻に開催される「モノ・モノサロン」でた

くさん学びました。

たとえば「ふるいモノ残しながら いいモノつくろう」というモノモノ運動。「生活用品の画一化、使い捨てが暮らしの根底を揺るがす時代に我々は何をなすべきか、とことん話し合おう」というわけです。

僕は1972年から家電メーカーで工業デザイナーとして仕事をしていましたが、オイルショックが起き、石油由来の樹脂部品を金属部品(ブリキ)に変更するという仕事を突貫作業で終わらせようとする頃、この問題が解消。その頃に一人の重症児と出会い、仲間と日曜大工でその子の訓練用具を製作していたころに出会った本が秋岡さんの「割ればしから車まで」です。

最近復刻されましたが、この本こそが僕の人生に大きな影響を与えました。

初版は新書版で表紙には「消費者をやめて愛用者になろう!」のサブタイトル、そして「立ち止まった工業デザイナー 秋岡芳夫 著」となっています。

「一言でいえば物を捨てないくらしのすすめ。いい物を長く使うことのすすめ。買わされる人間から、買う人間になることのすすめ。道具の使い方を自分で工夫してくらす。智慧のあるくらしのすすめ。昔のように道具を親切につくり、物を大事にするくらしにもどらないと、もうじき私たち地球は駄目になる。消費者をやめて、愛用者になろう。(「割ればしから車まで」のカバーのコメント)」

柳先生の場合、作品集はいくつかあるが、まとまった著作は少ないのですが、それに比べると秋岡さんの著作は実に多いのです。

ここで紹介するこの小さな本は「秋岡流モノづくり学」の入門書と言えるでしょう。入門書と言っても肝心なところは押さえてあります。

たとえば、身体の一部を使ってモノの長さや量をはかる身度尺の話など、秋岡さん得意のモノ(者)とモノ(物)との関係がわかりやすく説明されています。椅子の高さや食卓の高さなどの決め方は、おそらく「目から鱗」だと思います。このことは僕が車椅子を設計するとき大いに役立っています。